

# A Biographical Study on Yoshida-no Muraji Yoroshi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 富吉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6159">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6159</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



## 吉田連宜伝考

—萬葉集人物伝研究（九）—

### 一、はじめに

A、吉田連宜は、『萬葉集』卷第五に、

宣啓す。伏して四月六日の賜書を奉り、跪きて封函を  
開き、拝して芳藻を読む。心神の開朗なること、泰初の月を  
懐くが似く、鄙懷の除祛すること、樂広の天を披くが若し。  
辺城に羈旅して、古旧を懷ひて志を傷ましめ、年矢停まらずして、平生を憶ひて涙を落とすが若きに至りては、但し達じんしへのみ排に安みし、君子のみ閑ることなし。伏して冀は  
くは、朝には翟を懷けし化を宣べ、暮には龜を放ち術を存し、張趙に百代に架え、松喬を千齡に追ひたまはむことを。兼ねて垂示を奉りし梅苑の芳席の群英の擒漢、  
浦の玉潭の仙媛の贈答は、杏壇各言の作に類し、衡臯稅駕の篇に疑たり。耽詠吟諷し、感謝歎怡す。宜が主に恋ふる誠、誠は犬馬に逾え、徳を仰ぐ心、心は葵藿に同じ。  
しかも碧海地を分かち、白雲天を隔つ。徒らに傾延を積む。何ぞ労緒を慰めむ。孟秋節に膺り、伏して願はくは、万祐

の日に新たなるを。今相撲部領使に因りて、謹みて片紙を付す。宜謹みて啓す。不次。

川 上 富 吉

後れゐて長恋せずはみ園生の梅の花にもならましものを  
諸人の梅花の歌に和し奉りし一首

(5八六四)

松浦の仙媛の歌に和せし一首  
君を待つ松浦の浦の娘子らは常世の國の海人娘子かも (5八六五)

君を思ふこと未だ尽きず、重ねて題せし二首  
はろはろに思ほゆるかも白雲の千重に隔てる筑紫の国は

(5八六六)

君が行き日長くなりぬ奈良路なる山齋の木立も神さびにけり  
(5八六七)

天平一年七月十日

大宰帥大伴旅人からの書簡と歌に対する返書と短歌四首がある。

また、『懷風藻』に、

B、

正五位下圖書頭吉田連宜。二首。年七十。

五言。秋日長王が宅にして新羅の客を宴す。一首。  
〔秋〕の字賦してを得たり。

西使言に歸らむ日、南登餞送の秋。人は蜀星の遠きに隨ひ、駿は斷雲の浮かべるを帶ぶ。一たび去けば郷國を殊にし、萬里風牛を絶つ。未だ新知の趣も盡くさねば、還りて作す飛乖の愁。

(藻七九)

五言。駕に吉野宮に從ふ。一首。  
神居深くして亦静けく、勝地寂けくして復幽けし。雲は巻くみ舟の谷、霞は開く八石の洲。葉黃たひて初めて夏を送り、桂白けて早も秋を迎ふ。今日夢の淵の上に、遺響千年に流らふ。

(藻八〇)

五言絶句二首がある。いずれも、文武天皇朝から聖武天皇の天平期に活躍した人物であり、特に、大伴旅人との関わりなど、吉田宜の伝記を考究してみると小稿の目的である。既に市村宏「吉田宜考」に倣って、再考してみるとした。

## 二、その氏姓名について

吉田連宜の出處は、『萬葉集』中、

- ① 卷第五、八六四の前の書簡に、宜啓・宜謹啓  
② 卷第五、目録（八六四）に、吉田連宜和梅花歌

一首

と四カ所に見え、『懷風藻』に、  
④ ③ (八六五) に、吉田連宜和松浦仙媛歌 一首  
" (八六六) に、吉田連宜思君未盡重題歌 二首

と二カ所に見え、『続日本紀』に、

正五位下内薬正吉田連宜 二首  
正五位下圖書頭吉田連宜 二首  
年七十。

と二カ所に見え、『続日本紀』に、

⑤

目録に、  
⑥ 本文（七九、八〇）の題に、  
⑦ 文武四（七〇〇）年八月二十日  
⑧ 和銅七（七一四）年正月五日  
⑨ 養老五（七一二）年正月二十七日  
⑩ 神龜元（七三四）年五月十三日  
⑪ 天平二（七三〇）年三月二十七日  
⑫ 天平五（七三三）年十二月二十七日  
⑬ 天平九（七三七）年九月二十八日  
⑭ 天平十（七三八）年閏七月七日

惠俊姓吉、名宜。

正六位下吉宜、從五位下。

医術、從五位上吉宜

從五位上吉宜、吉田連。

吉田連宜。取弟子、將レ

令習業。

從五位上吉田連宜為二図書頭。

從五位上吉田連宜正五位下。

正五位下吉田連宜為二典

薬頭。

と八カ所に見え、『藤氏家伝<sup>(5)</sup>』（下、武智麻呂伝）に、

⑮ 神龜・天平初期（七二四～七三八） 方士、吉田連宜。  
とあり、『日本文德天皇実錄<sup>(6)</sup>』に、

⑯ 嘉祥三（八五〇）年十一月六日

祖正五位上図書頭兼内薬  
正相摸介吉田連宜。

と、計十六カ所に見える。時間的順序からみて、⑦が初出で、この時、僧籍から還俗し、その元の、氏「吉」、名「宜」に戻り、⑩の神龜元（七三四）年に、賜氏姓「吉田連」となり、以後、⑯まで、氏姓名の表記は、「吉田連宜」と一貫している。（⑯「正五位上」は、死後追贈か。）

（一）氏「吉」・「吉田」について

前記⑦の初出時、文武四（七〇〇）年八月は、その二カ月前の六月十七日に「大宝律令」が撰定され、その施行に当って、行政の実務担当者として多くの有識者を必要とされ、その一環として、還俗者を登用することとなつた結果、

僧、通徳、恵俊ゑいしゅんに勅して並びに還俗せしめたまふ。化へ度すること得ず。但し、諸の博士を見るに、年齒衰よはひわちどへ老いたり。若し教へ授けずは、恐るくは業絶えむと致。望み仰あふがくは、吉田連宜……等七人、各弟子を取りて、業を習はしめむことを。：

その生徒は陰陽、医術に各三人。  
とあり、また、『藤氏家伝下』（武智麻呂伝）に、「方士には、吉田連宜らあり。」とあって、「方士」は、「医薬の有識者、学者」をいう。なお、『続日本後紀』承和四（八三七）年六月二十八日条に、孫の吉田宿祢書主らが興世朝臣の賜氏姓の改賜記事に、「世伝『医術』」となり、⑮の『日本文德天皇実録』嘉祥三（八五〇）年十一月六日条、興世朝臣書主卒伝に、

とおり、「医・薬」の業を専門とした人物であることが分明できる。「吉」氏の初出は、『日本書紀』天智天皇十（六七一）年正月、百濟からの渡来人（亡命貴族）の多くの人々に叙爵した記事中に、

とあるように、「その芸」は⑨の養老五（七二一）年正月二十七日の、学業にすぐれたものを褒賞する詔に、

「文人・武士は国家の重みする所なり。医ト・方術は古今、斯れ崇ぶ。百僚の内より学業に優遊し師範とあるに堪ふる者を擢ぬきだして、特に賞賜を加へて後生を勧め励すべし。」とのたまふ。：医術の從五位上吉宜。：

とあって、「医術」であり、⑪の天平二（七三〇）年三月二十七日の

牟陰陽に開へり。に授く。小山下を以ちて余の達率等五十余人に授く。童謡ありて「云はく、橘は己が枝々生れれども玉に貫く時同じ緒に貫く」といふ。

(紀一二五)

「吉大尚 葉を解れり。」とある。『懷風藻』の「淡海朝大友皇子」伝に、

年甫めて弱冠、太政大臣に拜され、百揆を總べて試みる。皇子博學多通、文武の材幹有り。始めて萬機を親しめすに、群下畏服し、肅然にあらずといふこと莫し。年二十三、立ちて皇太子と爲る。廣く學士沙宅紹明・塔本春初・吉大尚・許率母・木素貴子等を延きて、賓客と爲す。

(藻1)

とあり、「学士」は、「学者」・「文学士」(藻序)のことであり、『続日本後紀』承和四(八三七)年六月二十八日条に、

達率吉大尚、其の弟少高等、土を憶ふ心ありて、相尋めて来朝。世に医術を伝え、兼ねて文芸に通ず。子孫、奈良京田村里に家し、仍ち、姓吉田連を賜ふ。

吉田連。おほかすがのあそみおな同じき祖。觀松彦香殖稻天皇孝昭うのはの皇子、天帶彦国押人命の四世孫、彦国葺命の後なり。昔、磯城瑞籬宮御宇御間城入彦天皇の御代、任那国奏し

と「医術・文芸」の才能ある家系と伝えている。なお、『新撰姓氏錄』と『医術・文芸』の才能ある家系と伝えている。なお、『新撰姓氏錄』<sup>(9)</sup>左京皇別下に、

吉田連 吉田の氏名は、下文にみえるように古代朝鮮で宰、本来は首長を意味する本姓の吉と、奈良京(平城京)田村里(奈良市尼ヶ辻町付近)の地名の一部である田とをあわせたことにもとづく。

吉田連の本姓は吉。『続日本紀』神亀元年五月辛未条に「從五位上吉宜。從五位下吉智首並吉田連」とあるように、神亀元年(七・四)五月、吉田連の氏姓を賜わった。

吉 古代朝鮮語で首長・王の義。金沢庄三郎は、吉について

て曰さく、臣が國の東北に三の己汝といふ地有り。下己汝。地の方三百里あり。土地人民も富饒へり。新羅國と相争ひ、彼此攝治こと能はず。兵戈相尋て、民、生を聊じえず。臣、請ふらくは、軍を將て此の地を治令めたまば、即ち貴國の部と為さむと。天皇大く悦びて、群卿に勅して、遣す應き人を奏さしめたまふ。卿等、奏して曰さく、彦國葺命の孫、塙垂津彦命、頭上に贊有り、三岐にして松樹に如し。君と号す。其の長五尺、力は衆人に過て、性も勇悍しと。天皇、塙垂津彦命を遣し令めたまふ。勅を奉りて鎮守りき。彼の俗、宰を称へて吉と為せり。故に、其の苗裔の姓を謂て吉氏と為す。男、從五位下知須等、奈良京の田村里河に家居れり。仍りて天璽国押開豊桜彦天皇の弘仁二年に、改めて宿禰の姓を賜ひき。続日本紀に合へり。

「愚案するに、吉のチも亦この称号にして、キは大の義なるべし。吉転じてキシとなる、歯舌両音の相通すること、上文に述べたるがごとくなればなり。新羅第十四等の官たる吉士（或云稽知或云

吉次）は即ちこれにして、或云稽知はよく其音韻変化の徑路を示せりといふべし。この吉士に冠するに、大の義ある朝鮮語コニ又コを加へたるが、コニキン、コキン（王）にして、コニキンの語尾を省きたるが即ち干岐なり」と述べ、また「記紀に、百濟を主とし、新羅・任那などの國主・国王・王をコニキシ又コキンと訓んであるのは、大吉士であつて、彼地の俗、宰を吉士又は吉と呼んだことは、既に前に述べたとおりである」とし、『北史』百濟伝の「百濟王号於羅瑕、百姓呼為健吉士、夏言並王也」の記事をあげている。

〔注(28)(29)は、金沢庄三郎『日鮮同祖論』<sup>[1]</sup> 110頁。124頁。〕

とあり、本、「吉（キチ）」氏から「吉田（キチタ）」氏への改氏は、<sup>⑩</sup>の神亀元（七二四）年五月十三日条の、渡来系の人々への賜氏姓記事中に、

十三日 辛未、從五位上薩妙觀に姓を河上忌寸と賜ふ。從七位下王吉勝に新城連、正八位上高正勝に三笠連、從八位上高益信に男挾連、從五位上吉宜、從五位下吉智首に並に吉田連、從五位下鰐兄麻呂に羽林連、五六位下賈受君に神前連、正六位下樂浪に香山連、從六位上金宅良・金元吉に並に国看連、正七位下高昌武に殖櫟連、從七位上王多宝に蓋山連、勲十二等高祿徳に清原連、無位伯祁乎理和久に古衆連、從五位下吳肅胡明に御立連、正六位上物部用善に物部射園連、正六位上久米奈保麻呂に久米連、正六位下賓難大足に長丘連、正六位下脚巨茂に城上連、從六位下谷那庚受に難波連、正八位上答本陽春に麻田連。

吉田連宜伝考

とある。これは、聖武天皇即位、神亀改元の宣命（第五詔。二月甲午）によるもので、この年五月十三日以降、<sup>⑭</sup>の、天平十（七三八）年閏七月七日「吉田連、典藥頭と為す」まで、さらに、承和四（八三七）年六月二十八日（『続日本後紀』）に、

また、官々に仕へ奉る韓人部一二人にその負ひて仕へ奉るべき姓名賜ふ。

右京の人、左京亮從五位上吉田宿祢書主、越中介從五位下同姓高世等、姓、興世朝臣を賜う。

とあり、「興世」と改氏するまでは「吉田」であったことになる。「吉田」は、多く、「キチタ」と訓んでいるが、「キチダ」「キツタ」と読むものもある。「よしだ」と和風に訓んだか明らかではないが、澤瀉久孝は、『新撰姓氏録』を引いて、「この傳によるとキチダと呼ぶべきであるやうだが、もとは吉氏であつたとしても、吉田連と姓を賜ふに及んではヨシダと改められたと見るべきではなからうか。」としている。「吉」（キチ・キツ）→「吉田」（キチデン・キチタ・キチダ・キツタ）→和風に「よした・よしだ」と訓んだものと思われる。

### (二) 姓「連」について

姓「連」については、前項に引用した<sup>⑩</sup>の神亀元（七二四）年五月十三日の渡来系の人々二十四人に賜姓記事中、「薩妙觀に河上忌寸」とある他、二十三人は「連」姓で、

從五位上吉宜、從五位下吉智首に並に吉田連

とある。「連」は、『日本書紀』天武天皇十三年（六八四）十月一日制定の「八色の姓」の第七位に当る。これ以後、「連姓」で、『日本後紀<sup>13</sup>』弘仁一（八一二）年九月四日に、

右京の人正六位上吉田連宮麻呂等に姓宿禰を賜う。

とあるまでは「連」姓であり、「宿禰」姓は、『続日本後紀』承和四（八三七）年六月二十八日に「興世朝臣」と改氏姓までの間とみるとができる。この間「連」姓の人物は、宜・智首の二人の他に、

① 吉田連兄人

天平二十（七四八）年十月八日、正七位上守侍医兼行大属河内大目（皇后宮職牒、正倉院文書。大日本古文書、三一一三頁）。天平勝宝元（七四九）年四月十四日、外從五位下。同年八月十日、紫微少忠。天平勝宝三（七五一）年十月二十八日、從五位下。

② 吉田連斐太麻呂

宝亀元（七七〇）年七月二十日、正六位上吉田連斐太麻呂外從五位下。同二年閏三月一日、内薬正。同七年三月五日、兼出雲掾。同八年一月二十五日、兼伯耆介。同九年二月四日、兼伊勢介。同十年二月九日、外正五位下。同十一年二月九日、内薬正侍医、兼相模介。天応元（七八一）年八月一日、從五位上。

③ 吉田連古麻呂

宝亀七（七七六）年一月七日、正六位上吉田連古麻呂外從五位下。同九年二月四日、内薬佐兼豊前介。同十一年二月十一日、外正五位下。天応元（七八一）年四月十五日、從五位下。延暦三（七八四）年四月七日、内薬正、侍医故の如し。同五年一月二十四日、内薬正侍医從五位下吉田連古麻呂兼常陸大掾。

④ 吉田連季元

延暦一（七八三）年一月十六日、正六位上吉田連季元外從五位下。同三年八月二十六日、伊豆守。

吉田連宮麻呂  
禰を賜う。（『日本後紀』）

⑤ 吉田連書主

⑤と同時に、「宿禰」姓となつた。後、承和四（八三七）年六月二十八日、右京人左京亮從五位上吉田宿禰書主。越中守從五位下同姓高世等。賜姓興世朝臣。（『続日本後紀』）。嘉祥三（八五〇）年十一月六日、從四位下治部大輔興世書主卒。（『日本文德天皇実録』）

⑥ 吉田連高世

⑤と同時に、「宿禰」姓となつた。後、⑥と同時、承和四（八三七）年六月二十八日、越中守從五位下同姓高世、賜姓興世朝臣。（『日本文德天皇実録』）

⑦ 吉田連尚

の六名を見ることができる。中、「侍医」兄人。「内薬正・侍医」斐太麻呂・古麻呂、の三名が医薬の業に携わっている。

『令義解』、「医疾令」に、「世習者。三世習医業、相承為名家者也」とあって、

①吉大尚・吉少尚兄弟→②大尚の子、宜（吉田連宜）→③宜の子、

兄人・斐太麻呂・古麻呂、

と三代に亘る名家であったことが分明できる。

（三）名「宜」について

表記「宜」は、『類聚古集』・『廣瀬本』・『神宮文庫本』に、「宜」とあるほか、『西本願寺本』には、「宜」とあり、『神宮文庫本』もある。「宜」とある。諸注釈書には、「拾穂抄」に「吉田ノ連宜」とあって、「ヨロシ」と訓んでいる。『童蒙抄』、「宜」、「ヨロシ」、『萬葉考』、『略解』・『古

義』・『新考』以後、「ヨロシ」で異訓はない。が、氏「吉」を「キツ・

キツ」と字音で読んで、名「宜」を訓「よろし」と読むのは整合性に欠ける。伊藤博は、「勅命によつて還俗させられ、吉宜の名を賜つた。<sup>(14)</sup>」

としているが、これは出家前・在俗時の「吉・宜」に戻ったと見るべきで、いずれも音読して「キチ(キツ)・ギ」であつたとすべきで、「ギ」が「よろし」になるのは、「吉田連」賜姓時に「吉田」に合せて「宜」と、和読したというのが妥当な推定ではないか。ちなみに、「吉」「宜」とともに、「よい。よろしい」の意で、「吉・宜」と氏と名の一重の好字嘉名で、次の『詩經』周南の著名な詩句、

桃夭  
桃之夭夭 灼灼其華 桃夭  
之子于歸 宜其室一 之子于歸  
桃之夭夭 有蕡其實 桃夭  
之子于歸 宜其家室 之子于歸  
桃之夭夭 其葉蓁蓁 桃夭  
之子于歸 宜其家人 之子于歸  
に典拠を求めることが出来よう。漢字文化圏（唐帝国・朝鮮半島の諸国および日本）の支配者層・知識人たちの共通の教養の一つが『詩經』であったことを考慮に入れてもよいのではないだろうか。まさに、『懷風藻』の詩一首（七九・八〇）及び孫書主の卒伝（『日本文德天皇実錄』嘉祥三（八五〇）年十一月己卯条の「其先出百濟國」「吉田連宜→石麻呂→書主」の系譜を指摘したが、『続日本後紀』承和四（八三七）年六月己未条の賜姓興世朝臣のことと、吉大尚、その弟少尚が来朝し、医術兼文芸を伝えたことなどを佚している。なお、『新撰姓氏錄』に言及していない。『姓氏錄』の吉田連を紹介したのは、契沖の弟子、海北若冲『万葉作者履歴』が最初であろうし、そこに、『続日本後紀』承和四年六月己未条を引いている。『古義』に至っても『姓氏錄』・『日本後紀』・『続日本紀』・『文德天皇実錄』の引用なし。近代に入って、武田祐吉『全註釈』・土屋文明『萬葉集私注』・澤瀉久孝『萬葉集注釋』・井村哲夫『萬葉集全注 卷第五』に引用がある。

いずれにしても、「六国史」その他の史料を基にして、仮系図を作つてみれば、次のようになるか。後考を俟つ。

（二）出自・家系

三、その歴史について

（未）文德天皇実錄第二云。嘉祥三年十一月甲戌朔己卯、從四位下治部大輔興世朝臣書主卒。書主右京人也。本姓吉田連。其先出自百濟。祖正五位上圖書頭兼内藥正相模介吉田連宜。父内藥正正五位下石麻呂、並爲侍醫累代供奉。宜等兼長儒道門徒有錄云々。承和四年上請改姓爲興世朝臣云々。卒時年七十三云々

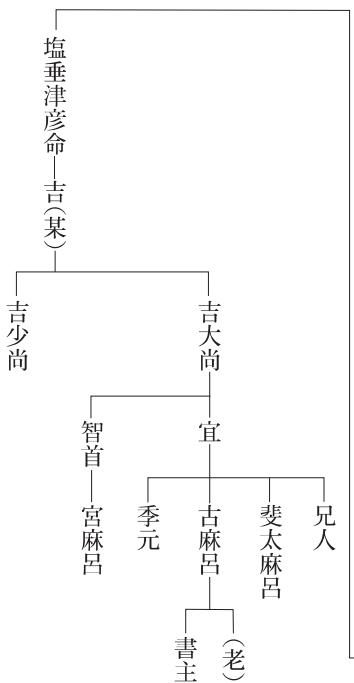
その出自について、初めて典拠を指摘したのは、契沖『萬葉代匠記

### 三、その歴史について

#### （二）出自・家系

孝昭天皇—天帶彦国押人命—○—○—○—彦国葺命—○—：

- ② 天平九（七三七）年九月二十八日。正五位下  
③ 天平十（七三八）年閏七月七日、典藥頭。  
④ 天平十五（七四三）年六月三十日。外從五位上倭武助を典藥頭。



## (二) 年齢・閱歴について 付係累

吉田宣の年齢について明記されているのは、Bに挙げた『懷風藻』に「年七十」とあるのみである。「年七十」は行年とみるのが定説である。これを基点として、その年齢を考えるのが常套とされている。『懷風藻』の編集が終了したのは、その序に、

時に天平勝宝三年歳辛卯に在る冬十一月なり。

とあって、「天平勝宝三（七五一）年十一月」であることが分る。とすると、宜は、天平勝宝三年十一月以前に「正五位下図書頭」を極官として「年七十」で没していることになる。『続日本紀』によれば、

諸の博士を見るに、年衰へ老いたり。若し教へ授けはずは、恐るらくは業絶えむと致。望み仰がくは、吉田連宜等七人、各弟子を取りて、業を習はしめむことを。

とあって、「衰老」の年齢であったかと思われること。『戸令』（6）に「六十を老と為よ」とあるから、この天平二（七三〇）年に「六十一歳」以上と見ることができる。この年の九年後は、「天平十一（七三九）年となる。この年に七十歳で没したと推定するのが妥当であろう。とすると、その生年は、天智九（六七〇）年となる。

この天智九（六七〇年）出生を基に、簡略な年譜を作つてみると、

- ① 天平五（七三三）年十二月二十七日。從五位上図書頭。（→天平九（七三七）年十二月二十三日、外從五位上秦忌寸朝元を図書頭。）

天智九（670）年生  
文武四（700）年八月二十日  
31歳  
僧惠俊、還俗して、吉宜。務広肆。

とあって、④の脚注（新大系本）に、「典藥頭の前任者は吉田宜（天平十四年閏七月癸卯条）。」とあるが、天平十四年に閏七月癸卯条は見当らない。③の年月日から④の年月日の間にも「典藥頭」・「吉田連宜」の記事は見当らない。<sup>17)</sup>なお、『類聚国史』・『大日本古文書』にも見当らない。大いに疑問である。「正五位下」になつたのは②天平九年で、③天平十年に典藥頭とあって、生存していたと確定してよい。なお、典藥頭は、官位相当で從五位下、図書頭は從五位上であるので、『懷風藻』の編者は「図書頭」を極官としたのであろう。とすれば、③天平十年から、④天平十五年の間に没したかと思われる。その理由は、天平二（七三〇）年三月二十七日の太政官奏と詔に、

和銅七	(714)	年一月五日	45歳
正六位下から従五位下。			
養老五	(721)	年一月二十七日	52歳
医術、従五位上。学業に優遊し師範として賞賜			
神亀元	(724)	年五月十三日	55歳
従五位上吉宜、従五位下吉智首に吉田連。(渡来系の人々に賜姓)			
天平二	(730)	年三月二十七日	61歳
吉田連宜、医術の弟子、三人を取る。			
天平五	(733)	年十二月二十七日	64歳
従五位上、図書頭。			
天平九	(737)	年九月二十八日	68歳
従五位上から正五位下。			
天平十	(738)	年閏七月七日	69歳
正五位下、典薬頭。			
天平十一	(739)	年 卒	70歳

となる。この年譜にその時代の社会的政的出来事を埋めて考えて行くことになるが、次に、いくつかの問題点を考えてみよう。

- (1) 天智九(670)年、出生。親、出生地など。
- (2) 文武四(700)年還俗時から天平二(730)年までの位官、業績。  
とくに、漢詩・和歌、旅人との関係など。
- (3) 天平二年以後、天平十一年没年までの閱歴。
- (4) 妻子・係累について  
以下、四点について概略考察してみよう。

(1) 親については、宜の出生年、天智九(670)年に近い吉姓の人物として、翌天智十(671)年正月、大友皇子太政大臣となり、皇子を中心とした政治体制が発足した時、百済の亡命貴族(佐平一人、

達率五十余人)に叙爵があり、「達率、吉大尚(薬を解れり)小山上」とある。「吉大尚」を当ててみるのが妥当か。これらの人々は、天智二(663)年八月、百済白村江の戦で、羅唐連合軍に日本軍が大敗し、母国百済滅亡の前後、百済から渡来・帰化した亡命貴族で、それぞれ、法律・兵法・医薬・儒学・陰陽などに習熟した有能な人物であったことが知られる。吉大尚は、天智九(670)年時、「広く学士沙宅紹明・塔本春初・吉大尚・許率母・木素貴子等を延きて、賓客と為す。」

『懷風藻』(大友皇子伝)とあり、その詩作品は伝わらないが医薬の他に、文芸(漢詩)の士であったことが分かる。その子、宜は『懷風藻』に詩二首(79・80)が採られている。なお、吉大尚の官位「達率」は百済の官位「十六官品」の第二位で、定員三十人の一人であり、天智朝の官位「小山上」は、天武十四(686)年の「務大(広)一位」・養老令の「正七位上」に相当する。同、天智十年十二月天智崩御。翌年、壬申の内乱があり、吉大尚とその家族の消息は不明。宜の母は、百済亡命貴族の達率階層の他氏、たとえば、「答本春初」(築城家・学士・兵法家。麻田連陽春の父)を考えに入れてみると意味深いものがある。出生地・生育地は、『続日本後紀』承和四(837)年六月二十八日条、『新撰姓氏録』に、「奈良京田村里」とあるが、これは、宣の文武四(700)年八月二十日、還俗後か、和銅七(714)年正月五日、従五位下、神亀元(724)年五月十三日、賜姓「吉田連」の前後であり、出生時、天智九(670)年時から、僧籍にあった時期を通し、文武四年前後までは、近江国・近江大津京付近であつた可能性が高いと考えてよいであろう。出家時期は不明であるが、壬申の乱の後十歳前後とみてよい。百済系の仏教寺院(おそらく、近江国かその周辺にあった)の童子となり、沙弥、僧となり、還俗時三十一歳まで、医薬の業を主とし、仏教を学んだものと思われる。または、その頃、渡唐して医薬・仏教を学び、文武四年八月以前に帰朝したとも考えられる。そうした例は幾人があるので再考の余地がある。

(2) 文武四(700)から天平二(710)年までの位官、業績  
文武四(700)年八月二十日、三十一年の時、

僧通徳、惠俊に勅して並に還俗せしめたまふ。代へ度すること各一人。通徳に姓陽侯史、名久爾曾を賜ひ、勤広肆を授く。惠俊には姓は吉、名は宜。務広肆を授く。その芸を用ゐむが為なり。

とあって、「務広肆」は「從七位下」に当り、「その芸」とは、養老五年(711)年一月二十七日条「医術の從五位上吉宜・天平二(710)年三月二十七日条「医術、吉田宜」・天平十(738)年閏七月七日条「典藥頭」・承和四(837)年六月二十八日条「世に医術を伝ふ」・嘉祥三(850)年十一月六日条「祖正五位上図書頭兼内薬正相摸介吉田連宣。父内薬正正五位下古麻呂。並に侍医と為り、累代供奉」とあって、「医薬」の芸であることが明白である。その習業は前項で述べた、父「吉大尚 薬を解れり」とあるのに始まる。

翌大宝元(701)年に、天智朝以来三十一年ぶりの遣唐使派遣とその陣容の一部任命があり、二年六月に出航した。

その一員に、「少錄无位山於億良」がいるが、「無位無姓」であることから見れば、この時期に還俗したものかと思われる。その後、和銅七(714)年一月五日授位者の名簿に「正六位下、山上臣億良・吉宜、從五位下」とある。億良は遣唐の功により臣姓を賜わったかとされる。吉宜も「医師」として渡唐したかとも考えられる。億良と宜とは十歳ちがいで、大宝元年時、億良四十二歳、宜三十二歳であった。旅人三十七歳で副使であったか。

大宝元(701)年六月二十九日「太上天皇、吉野離宮に幸したまふ。」秋七月十日「車駕、吉野離宮より至りたまふ」とある。(B)宜の詩「駕に吉野宮に從ふ」(藻80)は、この時の応詔詩であったか。養老五(711)年一月二十七日。「医術の從五位上吉宜、絶十足、糸十絢、布廿端、鍼廿口」の褒賞を賜う。この四日前、二十三日

条に、「從五位下山上臣億良ら、退朝の後、東宮に侍らしめたまふ。」とある。この時点では、億良は從五位下、宜は從五位上。

神亀元(724)年五月十三日、渡来系の人々に賜姓記事中、「從五位上吉宜、從五位下吉智首に並に吉田連」とある。この二月前、三月一日に「天皇、芳野宮に幸したまふ。」とあって、聖武即位後、最初の吉野行幸で、『萬葉集』に、大伴旅人(時に、六十歳)の歌として

暮春の月、芳野離宮に幸したまひし時に、中納言大伴卿の、勅を奉りて作りし歌一首 短歌を并せたり。未だ奏上に遅らざる歌  
み吉野の 吉野の宮は 山からし 貴くあらし 川からし やけくあらし 天地と 長く久しう 万代に 変はらずあらむ  
行幸の宮

(3315)

昔見し象の小川を今見ればいよよさやけくなりにけるかも

(3316)

とある、「昔見し」(3316)とあることから、大宝元年時の行幸に従駕したか。後に、「帥大伴卿の歌五首」(3331~3336)に、「わが命も常にあらぬか昔見し象の小川を行きて見むため」(3332)・「わが行きは久にはあらじ夢のわだ瀬にはならずに淵にてありこそ」(3336)・「帥大伴卿の遙かに芳野離宮を思ひて作りし歌一首」として「隼人の瀬戸の巣も鮎走る吉野の滝になほしかずけり」(6960)と回想追慕している。大宝元年六月と神亀元年三月の行幸に、旅人と宜も同行し、この二人の文芸的接点は、後年、(A)天平二(710)年四月六日、旅人からの来簡への、七月十日付返書と歌四首(5864~5867)へと発展していくことに留意したい。

なお、神亀元(724)年五月十三日に、同時に吉田連の賜氏姓を

受けた「吉智首」は弟と思われるが、この先、養老三（七一九）年正月十三日、「正六位上吉智首從五位下。」とあり、『懷風藻』に、「從五

位下出雲介吉智首。一首。年六十八」（藻56）とあり、おそらく、天平十一（七三九）年、宜の死後数年の間に卒したものとみえる。

次に、神龜三（七二六）年五月二十四日に、新羅使が来朝し、七月十三日に帰国。その新羅使を饗する左大臣長屋王の佐保の宅（作宝樓とも）での秋日の詩宴での作「秋日長王が宅にして新羅の客を宴す。」と題する五言絶句が『懷風藻』に、

痩身であったと推定できようか。

(3) 天平二年以後、天平十一年没年までの閱歴

天平三（七三二）年七月二十五日に、「大納言從一位大伴宿禰旅人薨しぬ。」とあり、『懷風藻』に「年六十七」とある。宜、六十二歳。

『萬葉集』に、

見れど飽かずいましし君が黃葉の移りい行けば悲しくもあるか  
(3四五九)

大學頭從五位下山田史三方（52）・從五位下大學助背奈王行文（60）・正六位上刀利宣令（63）・大學助教從五位下毛野朝臣虫麻呂（65）・左大臣長屋王（68）・從三位中納言兼催造宮長官安倍朝臣広庭（71）・正六位上但馬守百濟公和麻呂（77）・正五位下図書頭吉田連宜（79）・贈正一位左大臣藤原朝臣綏前（86）

と九名九首があり、「正五位下図書頭吉田連宜」の一首がある。當時、文人として活躍していたことが分かる。天平元（七一九）年二月、長屋王の変（二月十日、密告。十二日自尽。）二月十七日に、「外從五位下上毛野朝臣宿奈麻呂ら七人、長屋王と交り通ふに坐せられて、並に流に処せらる。自余の九十人は悉く原免に從ふ。」とあり、宜は「流七人」の一人であつたか「自余の九十人」の一人であつたか不明であるが、翌二年三月二十七日、医術の得業生三人の教授に当つているので「自余」の一人であつたろう。また、「年歎衰老」とあり、嘉祥三（八五〇）年十一月六日、孫の書主の卒伝に「身稍輕捷。超躍高岸。浮渡深水。」とあり、『萬葉集』に、大伴家持作「嘆咲瘦人歌二首（16三八五三・三八五四）」の左注に「右、有吉田連老、字曰石麻呂、所謂仁敬之子也。其老為人、身體甚瘦、雖多喫飲、形似飢餓。因此、大伴宿祢家持卿聊作斯歌、以為嘆咲也。」とある

右の一首は、内礼正縣犬養宿祢人上に勅して卿の病を検護せしむれども、医薬驗なく、逝水留まらず。これに因りて悲慟して即ちこの歌を作りき。

とある。医薬の事に当つた人物の中に、吉田宜も居たのではないかと思われるが、宜の作歌・作詩は見当らない。

天平五年十二月二十七日に、「從五位上吉田連宜を図書頭。」とあるが、『萬葉集』に、この年、山上憶良は「年七十有四」（「沈痼自哀文」（五八九七の前）・「老身重病、経年辛苦、及思兒等歌七首」（五八九七・九〇三））左注に「天平五年六月内申朔三日戊戌作」とあって、間もなく、天平五（七三三）年に無位無官の「山上憶良」として逝去した。宜の看護、追悼の詩歌はない。宜、六十四歳。

天平九（七三七）年九月二十八日、「從五位上吉田連宜、正五位下。」六十八歳。この年正月に、八年四月に出発した遣新羅使帰朝するも、大使は津島に病死、副使も罹患して入京出来ず、天然痘が大流行し、藤原四兄弟（房前・麻呂・武智麻呂・宇合）も四月から八月にかけて相次いで病死。「是の年の春、疫瘡大きに發る。初め筑紫より來りて夏を経て秋に涉る。公卿以下天下の百姓相繼ぎて沒死ぬること、勝げて計ふべからず。」とあり、この九月二十八日の任官叙位は、疫病による多くの官人の病没の欠員を補うための特別の措置であった。從三

位鈴鹿王を知太政官事。従三位橘宿禰諸兄を大納言」とする諸兄政權が始まる。

翌十年閏七月七日、「正五位下吉田連宜、典藥頭」となる。六十九歳。翌十一（七三九）年に「正五位下図書頭（目録に内薬正）」吉田連宜。年七十。（『懷風藻』79・80）で卒した。

#### （4）妻子・係累について

宜の妻は不明であるが、母と同じく、百濟亡命貴族の達率階級の娘であろう。子は、明らかなものとして、「古麻呂」がいる。兄人・斐太麻呂、季元もその兄弟であろう。「書主」は古麻呂の子で、孫に当る。

吉田連宜が医家として大成し、兄人は天平二十（七四八）年十月八日、正七位上侍医となり、斐太麻呂も宝亀二（七七一）年閏三月一日、外從五位下内薬正、同十一年二月九日、内薬正侍医従五位下となり、古麻呂も延暦三（七八四）年四月七日、正五位下内薬正侍医となつた。宣・兄人・斐太麻呂・古麻呂の四人が、内薬正侍医となつた。嘉祥三（八五〇）年十一月六日に卒した古麻呂の子の「従四位下治部大輔書主」は医薬の官としての記録はない。

## 四、おわりに

大伴旅人・山上憶良をはじめ、多くの『懷風藻』詩人・『萬葉集』歌人との文芸的交流については、別に考察することとして、概略、吉田連宜の伝記の一覧は果したかと思う。「関係年譜」を付すべきところ、考半ばのため省略した。後考を期すこととする。

### 注

（1）『萬葉集』の本文・訓読は、新日本古典文学大系本『萬葉集』に拠つた。以下、『萬葉集』の引用は同書に拠る。

（2）『懷風藻』の本文・訓読は、日本古典文学大系本『懷風藻文華秀麗集本朝文粹』に拠つた。以下、『懷風藻』の引用は同書に拠る。

（3）大久間喜一郎・森淳司・針原孝之編『萬葉集歌人事典』（昭和五十七（一九八二）年三月）の「吉田連宜」項目に、参考文献として、「吉田宜考」

市村宏『萬葉集新論』とあるが、『続萬葉集新論』（昭和四十七（一九七二）年五月）が正しい。

（4）『続日本紀』の本文・訓読は、新日本古典文学大系本『続日本紀』に拠つた。以下、『続日本紀』の引用は、同書に拠る。

（5）『藤氏家伝』の本文・訓読は、沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉著『藤氏家伝（鍊足・貞慧・昌伝・注釈と研究）』に拠る。以下、「家伝」の引用は、同書に拠る。

（6）『日本文徳天皇実錄』の本文は、『新訂國史大系』本に拠つた。適宜、訓読した。以下、同じ。

（7）『続日本後紀』の本文は、『新訂國史大系』本に拠つた。適宜、訓読した。以下、同じ。

（8）『日本書紀』の本文・訓読は、新編日本古典文学全集本『日本書紀』に拠つた。以下、同じ。

（9）『新撰姓氏錄』の本文・訓読は、佐伯有清『新撰姓氏錄の研究』本文篇・考證篇に拠つた。以下、同じ。

（10）注（9）の『考證篇』に拠る。

（11）金沢庄三郎『日鮮同祖論』（昭和四（一九二九）年四月刊）

（12）澤瀉久孝『萬葉集注釋』卷第五

（13）『日本後紀』の本文は、『新訂國史大系』本に拠つた。適宜、訓読した。

（14）伊藤博『萬葉集釋注』三

（15）『詩經』の本文・訓読は、新編漢文大系本『詩經』に拠つた。以下、同じ。

（16）海北若冲著『萬葉作者履歴』（宝曆元年（一七五一）以前の成立。）は、別名『萬葉集作主履歴』・『萬葉集人物履歴』ともある。『萬葉集』中の人名を、天皇以下諸主・諸姓に分類して、その履歴を考証したもの。その原本は散佚したが、写本は数点散在していることから、かなりよく参考されたものかと思われる。『佐佐木信綱『萬葉集事典』考證・作者（七

三八頁)・久松潛一『契沖』・『国書総目録』・川上富吉「万葉集人物伝の研究——とくに、帰化系歌人について——」(『私学研修』85号。昭和十五(一九八〇)年十一月)参照)。

国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルムの中、刈谷図書館蔵本『万葉集作主履歴』三冊本写本に拠る。その奥書を次に写しておく。

右萬葉作主履歴上中下三冊以故田中道

麻呂所藏本讌人書寫畢

天明八年戊申十月二十二日 稲懸太平 花押

文化六年己巳五月廿四日書寫畢 安田廣治 花押

安田廣治の蔵本をかりて人にあつらへて書写せり 弘訓

(17) ④の新大系本『続日本紀』四二七頁、注二五の脚注「典葉頭の前任者は吉田連宜(天平十四年閏七月癸卯条)」の「天平十四年」は③の「天平十年閏七月癸卯」の誤記である。

(18) 新編日本古典文学全集本『日本書紀③』付録、「百濟の官位」(五八七頁)に拠る。

(19) 答本春初・麻田連陽春については、拙稿「麻田連陽春伝考——萬葉集人物伝研究(八)」(『大妻女子大学紀要—文系』44号、二〇一二年三月)参照。

(20) 『新撰姓氏録』に「男、從五位下知須等、奈良の京の田村里河に家居れり。:神亀元年に、吉田連の姓を賜ふ。吉田は姓の由来。田は居地の名を取れり。」とある。「知須」は、「智首」と同一人物で、養老三(七一九)年正月十三日に、正六位上から從五位下となつた。

(21) 天智天皇四(六六五)年二月是月條に「百濟の百姓男女四百余人を以ちて、近江國神前郡に居く」。天智八(六六九)年是歲條に「佐平余自信・佐平鬼室集斯等男女七百余人を以ちて近江國蒲生郡に遷し居く。」とある。

(22) 壬申の乱(壬申の年(六七二)六月~九月)に際し、百濟系貴族の多くは、中立ないし天武側についたものと思われる。その証の一、二を示しておこう。天武天皇一(六七三)年閏六月六日條に「大錦下百濟沙宅昭明卒せぬ。為人、聰明穎智にして、時に秀才と称はる。是に天皇、驚きまして、恩を降して外小紫位を賜ひ、重ねて本国の大佐平位を賜

ふ。」・天武天皇六(六七七)年五月三日條に「大博士百濟人率母に勅して、大山下位を授けたまふ。因りて三十戸に封す。」とあり、「外小紫位」は頭注に「壬申の年の功臣に対する贈位」とある。

(23) 近江「志賀山寺(崇福寺)」は、天智七(六六八)年の創建と『扶桑略記』にある。あるいは藤原鎌足・武智麻呂に由縁ある「比叡山(寺)』(『藤氏家伝』下、武智麻呂伝。『懷風藻』麻田連陽春の詩(105)。拙稿「麻田連陽春の和歌と漢詩——「麻田連陽春伝考」統一』(『大妻国文』43号、平成二十四(二〇一二)年三月)参照)。または、延暦二(七八三)年十月十六日條に「百濟寺に近江・播磨の二国の正税各五千束を施す。」とある百濟王氏が創立管理した寺か。

(24) 『僧尼令』(6)に、「凡そ僧は、近親郷里に、信心の童子を取りて、供侍すること聽せ、年十七に至りなば、各本色に還せ。」とある。

(25) その一例として天宝元(七〇一)年一月二十三日、遣唐使任命、渡航は二年六月二十九日の一員に贈った『萬葉集』卷第一に、

三野連(名岡)の入唐せし時に、春日藏首老の作りし歌

ありねよし対馬の渡り海中に幣取り向てはや帰り来ね

(一六二) の作者、春日老は、大宝元(七〇一)年三月十九日「僧弁紀をして還俗せしむ。代へ度すること一人。姓春日倉首、名老を賜ひ、追大壱を授く。」とする説(永井義憲「南法華寺古老伝」について)(『宗教文化』八輯、一九五二年)および、拙稿「春日藏首老伝考——萬葉集人物伝研究(七)」(『大妻女子大学紀要—文系』39号(平成一九(二〇〇七)年三月)参照)。

(26) 『続日本紀』二〇七頁、注二五。

(27) 拙稿「旅人論の課題——「入唐使」と「大宰帥」をめぐって——」(『万葉歌人の研究』昭和五十八(一九八三)年一月。初出「旅人と遠の朝廷」(上代文学会編『万葉集の時代と文化』昭和四十九(一九七四)年十月)参照)。

(28) 「(1)親について」の項、および「注19」参照。